



Title	Joseph Conrad の "Falk" に見る An Enfilading View"
Author(s)	中村, 嘉男
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1986, 26(2), p.87-99
Issue Date	1986-03
URL	http://hdl.handle.net/10069/15217
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T14:44:25Z

Joseph Conrad の “Falk” に見る

“An Enfilading View”

中 村 嘉 男

“An Enfilading View”

in Joseph Conrad's “Falk”

Yoshio NAKAMURA

I

Typhoon and Other Stories に収められている中篇 “Falk” には、単にその作品ばかりでなく、Conrad の全作品を理解するための鍵となる言葉が用いられている。それは、この小論の論題にもなっている “an enfilading view” であるが、物語の最初のパラグラフで次のような用いられ方をしている。

And through the wide windows we had a view of the Thames; an enfilading view down the Lower Hope Reach. But the dinner was execrable and all the feast was for the eyes!¹

この箇所は、海の仕事に携わっている者が数人見通しのよい河沿いの宿屋で食事をとっているところで、中心となる物語の導入部になっている。出された料理の呪わしいまずさにもかかわらず、窓外の景色とワインがよかったためか話がはずみ、Falk という名の、何十年も前に東南アジアのある港町で曳船の船長をしていた男にまつわる思い出話が、ここで年配の船長から語られることになるのだ。この語り自体、まずい食事を補っていて、その食事のひどさを埋め合わせている河沿いの “enfilading view” と意味的に重ねられているように思われる。なぜなら語りは、景色を enfilade する行為と共に食事から呪わしさを祓おうとしているばかりか、その祓い方があとで見ると作品世界の事象をす

べて *enfilade* する方法をとっているからだ。

それでは、*enfilade* とは、一体いかなる行為を意味する言葉なのだろうか。それは、建築用語としては、「つながった部屋のすべてが見通せるようにドアを向かい合わせに並べる」というような意味である。従って“*an enfilading view*”は、「遠くまで見通しのきく景色」というほどの訳でよいかもしれない。ただ、その言葉には、「映った姿が無限に続くように部屋の両側に鏡を向かい合わせに置く²」というやや特殊な意味もある。つまり、遠くまで見通したとき見えてきたものがそれぞれ相以物だったということもあるのだ。Conrad が OED や Webster にも載っておらず、かろうじて The Random House Dictionary に見られる *enfilade* のこの意味を果たして知っていたかどうかは詳らかでない。が、この意味を知って使ったのではないかと思いたくなるほど、作中に相似物が沢山出てくるのである。

相似物の代表的なものは、“Falk”のすべての登場人物である。彼らは皆等質であると見なしうるのだが、それは、各々が閉された自己中心的な世界の中で“*self-preservation*” (p.198) のため懸命に生きているからだ。中心となる物語の中では船長職についたばかりの独身青年として登場する語り手の船長（私として出てくるので以後「私」として表記する）も、その「私」が毎晩のように訪ねて一緒に雑談した Hermann 船長も、その Hermann の姪がお目当てで「私」と同じように頻繁に訪ねて来た Falk も、その Falk を毛嫌いして彼の陰口ばかり言っている Schomberg も、皆それぞれ独善的な思いに囚われ“*self-preservation*” のために一所懸命なのだ。いや、ちょっと目を離せばいつもロープの端にかじりついている Hermann の赤ん坊や、ボロ人形を死にかけた子供と仮定してしょっちゅう歎き悲しんでいる Hermann の長女 Lena さえ、彼らなりに自分を守る戦いに加わっていると言えるかもしれない。こうして、“Falk”という作品世界には、どこまで見ても同じものしか見えてこないのではないかと思えるほど閉鎖的な構造が連続と認められるのである。“*self-preservation*”に囚われて自分のことしか目に入らない人たちが次々に登場するので、同じものを連続的に映し出す鏡の部屋の呪縛がいつまでも断ち切れないように思えてくるのだ。

しかし私たちは、この呪縛に耐えて、鏡のあいだに登場するものを徹底して見つめ続けなければならない。なぜなら、二枚の鏡を打ち破って二つの戸口に変化させ、一層遠くまで見通すことを可能にするには、ねばり強い凝視は欠かせないものだからだ。もちろん、そのような凝視だけが“*an enfilading view*”

を閉された部屋の中のものから、時間的、空間的にはるか遠くまで見通すものに変えるわけではない。自己中心的な思念に閉されていた「私」の Falk に対する発作的な話しかけもまた、“an enfilading view”を根底的なものにする切っ掛けになった行為だった。この衝動的な行為を皮切りに Falk に積極的に係わっていくことによって「私」は、自分を含めた周囲の人たちの閉鎖性が Falk の食人体験にまで続くことを見通せるようになったのである。大切なのは、速々と続く等質構造のこの根底的の把握が、それに対するねばり強い非肯定の姿勢を可能にするように思われるということだ。以下、等質構造を見通す知的凝視と、発作的な話しかけという衝動的な動きが“an enfilading view”を根底的なものにし、さらにそれが等質構造への強靱な非肯定を可能にしていくという問題を、順次考察してみたい。

II

まず、“Falk”の登場人物が皆“self-preservation”に囚われた鏡の間の住人であることを見つけてみよう。その作品に描かれている空間はすべて閉された鏡の部屋になっているが、特に Hermann の船室はその代表的なものである。その Hermann の船室を主人公の「私」が毎晩のように訪れたのは、簡単に言えば、現実逃避による自己慰撫のためである。前任者の船長の急逝のため生まれて初めて船長になってまだ間がない「私」は、自分を故意に苦しめるかのように次々に発生する面倒な事態に耐え切れず、それから逃れるように Hermann の船室に入り浸ったのだ。「私」が逃避的になったのは、まず第一に、前の船長が自愛的な詩作やバイオリン演奏に耽ったため煩わしい仕事が山のように残されていたからであり、第二に、その後始末を率先してやるべき一等航海士が、前の船長ほどではないにせよ、やはり自己中心的な思念に閉された男で、「私」にあまり協力的でなかったからである。さらに、困り果てていた「私」に追い討ちをかけるように、伝染病にかかる乗組員が出始め、特に、頼りにしていた給仕が入院して「私」が気落ちしていたとき、彼の代りに雇った中国人から虎の子の32ポンドを盗まれ、「私」は自分の船に帰るのが厭わしくなるほど現実に対して逃避的になっていったのだ。

それゆえ、泥棒の中国人と一緒に追いかけてくれた Hermann 船長から家庭的な雰囲気濃厚に漂わせる彼の船室に招待されてからというもの、そこが

「私」の格好の逃避所になっていったのも自然な成行きと言えよう。「私」は、船長の仕事をないがしろにしたわけではなかったが、厳しい現実の荒波から完全に守られているように見える Hermann の船室の居心地の良さにずると長居をしてしまい、自分の船に戻るのはいつも深夜になってからであった。もちろん「私」はそこで雑談ばかりしていたのであるが、そのとき Hermann からよく聞かされたのは、彼がもうすぐ自分の船を売って故国のドイツに帰るといふ計画だった。それは大きくなる子供たちに教育を受けさせるためだったが、この近い将来の生活の一大変革が余程気になるのか、彼は飽きることなくその話を繰り返すのである。言わば彼は、脳裏の鏡にドイツにおける家族の不安な未来を映して見ていたのだが、そこに映る像はいつ見ても皆同じ形をしていたのだ。同時的に見た場合それらの像は、向かい合わせに置いた二枚の鏡が映す像のように、遠々と続く相似形として捉えられると言えよう。

もちろん、Hermann の船室で見られる連綿たる相似形は、「私」や Hermann のものに限られるわけではない。その部屋に登場する人物の数だけ相似形の種類も存在するのだ。例えば、Hermann の長女 Lena は、「臨終ごっこ」とでも言えるような遊びを飽きもせず繰り返すことによって、自愛的な像を鏡に遠々と映している。しかも、火ばしでつまむことも憚られるほど汚れた人形を“in extremis” (p.157) の状態にあると考えて抱きすくめたり箱の中に寝かせたりして絶え間なく看病する Lena には閉鎖的な自己憐憫がありありと窺えるのに、その感傷主義は、彼女の幼い弟たちばかりか母親の Hermann 夫人をも巻きこむほど強い伝染力をもっているのである。それはナルシズムの呪縛の強さを物語っていると言えるが、これについては名作 *The Nigger of the “Narcissus”* に描きつくされている。その作品に登場する卑劣漢 Donkin は、死にかけている黒人水夫 James Wait から無理矢理金を巻き上げながら、死におびえる彼を哀れんで涙をにじませた³。それは Donkin が、いつかは死んでゆかねばならない我が身を Wait に見たからである。このような同情の仕方は世間の人知人や隣人の葬式に参列してしばしば行なっているものであり、Donkin が特に卑劣だから自愛的な同情をしたということではない。ナルシズムには皆足元をすくわれやすいのだ。

Hermann の船室においても、Lena を始め、Hermann 夫妻や「私」などは皆ナルシズムの罠にはまっている。ただ、純粹自然を具現しているような Hermann の姪と、存在の仕方が彼女に似ている Hermann の赤ん坊や Falk だけは、ナルシズムに囚われていない。これは、Hermann の姪たちが人間とい

うより自然に近い存在の仕方をしているためである。しかし、彼女たちもまた、自然の反復性をもっており、鏡の部屋の住人であることに変わりはない。彼女たち三人の存在の意味については次の章で詳しく論じることにして、ここでは、「私」と Hermann の互いに閉されて自愛的な態度や思い込みからとんでもない誤解が生じ、それが Falk を巻きこんでいく経過を辿ってみたい。

「私」が Hermann を夜毎訪ねていったのは、先に見た通り、自己慰撫のためだったが、「私」以外の人たち、例えば Hermann や世間一般の人たちは決してそう思っていなかった。彼らは皆一様に、「私」が Hermann の見事な肉体をした姪を目当てにしていたと思ったのである。彼らは言わば、閉された場の中で「私」の虚像を遠々と見続けていたわけだが、それを許容したのは「私」自身の閉された生活態度にほかならなかった。その「私」の態度を最も手前勝手に誤解した人、あるいはそれに一番手ひどく騙された人は、「私」と一番親しく付き合っていた Hermann その人である。Hermann は、ドイツに帰る船賃を節約するため姪を植民地で嫁がせたいと思っていたが、彼女にいつも会いに来る Falk には大変不満な思いをしていた。Falk は毎晩のように訪ねて来るのに挨拶一つまともにはできないし、ほとんどいつも黙って座っているだけなのである。そこへいくと、彼に劣らず熱心に訪ねてくる「私」はずっとまともな人間だと思った Hermann は、「私」の来訪の目的が自分の姪にあると勝手に思い込み、姪の結婚相手として「私」の方が好ましいと考えるようになる。しかもその気持を彼は Falk に伝えたため、「私」にとって思いもよらぬ面倒な事態がもち上ってしまうのだ。

すなわち「私」は、港にただ一隻しかない曳船の船長の Falk から自分の船を沖に出してもらえなくなるのである。この仕打ちは「私」には青天のへきれきにほかならず、それを招く原因を自分も作っていたとはどうしても思えない。「私」には、黙りこくっている Falk に一度も話しかけることなく、Hermann の姪の豊かな肉体の近くにいることに男なら誰でも感じる喜びを感じていた自分の罪のない行いが、Falk の手厳しい仕打ちを招く遠因になっていたとはとても考えられないのだ。Falk を雇っている船会社の社長 Siegiers 氏から Falk の恋仇と見なされても仕方のない「私」の行動の “very marked want of discretion” (pp. 187—188) を注意されても、依然として自分が悪かったとは思えない「私」は、相変らず自己正当化にこだわってくよくよ思い悩むだけで、Falk に直接会って状況の打開を図ろうとしない。それどころか「私」は、Falk との直接交渉を回避し、彼に頼らずに問題を解決しようとして、自らを一層窮地に

追いこんでしまうのである。

すなわち「私」は、散々思い悩んだ挙句、Falk 以外に河口の水深に詳しいただ一人の男 Johnson に水先案内を頼もうとして、手酷い目に会うのだ。非番の時間を台無しにされひどく不機嫌になった警官と共に探しあてた Johnson という男は、金さえあれば酒ばかり飲んで働こうとしない大変な怠け者であり、そのくせ自尊心だけは人一倍強くて、傲慢にも、「私」にいきなり押しかけて来たと言ってその非礼を謝罪させようとしたのである。彼もまた、“Falk”のほかの登場人物と同じように他人と出会おうとはしない鏡の部屋の住人であり、自分の意識の鏡に白人の紳士という虚像を連綿と映して悦に入っている哀れな男だったのだ。「私」はこの男に金を与えて働く気をなくさせたのが Falk だということを知り、彼の手がここまで伸びていることに愕然とする。最後の望みを絶たれたと思った「私」は、やっとの思いで Schomberg のレストランに辿り着くと、危険を承知で自分で船を出す以外にないと覚悟を決めるのだが、どうして自分がこんなひどい目に会わなければならないのかと、またもよくよ考えこむ。どう考えても自分が無実であるとしか思えない「私」には、運命の不当性しか見えないのだ。その「私」の自己正当化を助長するように、店の主人 Schomberg がそっとやって来て色々慰めるのである。

この Schomberg もまた、典型的な鏡の部屋の住人である。彼の“self-preservation”への執着はすさまじく、何とか店をはやらせたいと思うあまり、Falk のように一度も自分の店に食べに来てくれない人には激しい敵意を抱いて、悪口を皆に言いふらすのだ。特に「私」には執拗に Falk の軽蔑すべき点を強調し、彼が“A miserable miser” (p.174) だとか、すべての人をねたんているから“dangerous” (p.176) だと言ったりする。しかしこれは、Falk よりも Schomberg 自身を表わしている言葉だと言えよう。Schomberg は、Falk について語るには、彼のことを知らなさすぎたのだ。彼はただ、金銭にこだわり、人をねたむ気持を誰よりも強くもっている自分自身を憎らしい Falk に投射し、それに向かって攻撃しかけているだけなのである。

この Schomberg から執拗に Falk の悪口を聞かされて「私」は、Falk の“enmity”の存在をもともと信じていなかったのに、それが「私」の船を座礁させうるほどの“extraordinary potency”をもっているような気がし始める (p.195)。Schomberg の“baseless gossip”が「私」の Falk 像を途方もなくうす気味の悪いものに始めたのだ。ところが、まさにこのとき、Falk がレストランに Hermann の忘れた日傘を取りに入ってきて、状況の大転換が起るこ

とになるのである。「私」は、彼が突然現われるのを見て、ほとんど発作的に彼に話しかけ、今までの嫌なことはすっかり忘れて穏やかに話し合う。その結果「私」は、Falk が見ていた彼の恋仇という「私」の虚像を打ち破ることに成功し、彼と Hermann の姪の仲をとりもつ代償として船を沖に出してもらえることになるのだ。

窮状を打開する元になったこの Falk への発作的な話しかけを、「私」は後になって、“my youth, my inexperience, my very real concern for the health of my crew” のせいにした。しかし何よりもそれは、“purely impulsive” なものだったということに意味があるように思われる。極く自然に体が Falk の方を向いて言葉が出てきたということが大切なのだ。もちろん、その衝動的な動きを巧妙に生かし利用した「私」の知の活動も見事だった。衝動と知は決して対立するものでなく、互いに補い合ってその力を十分に発揮するものなのである。「私」が衝動と知の結合したこの一連の行動によって得たものは、単に船を沖に出してもらおうということだけではなかった。「私」は、Falk からすっかり信頼され、彼が昔犯した恐ろしい食人行為について打ち明けられて、“self-preservation” のための最もすさまじい原初的な戦いの存在を目の前に突きつけられるのだ。しかも「私」は、Hermann が Falk の話を聞くことを拒絶し、それについて知らないふりを装うのに対し、その恐ろしい事実を見すえながら Falk と Hermann の姪が一緒になれるよう努力するのである。その行為は、Hermann が Falk と姪をやっかい払いしたいために二人の結婚に同意したのと根本的に異なっている。それは、Hermann のように“self-preservation” のためのすさまじい戦いに対して知らんふりをすることによってそれを黙認するのではなく、その戦いの構造を根底から見すえることによってそれに対するねばり強い非肯定の姿勢を養っていく行為なのだ。これが具体的にどういう意味なのか、さらに考察をすすめていきたい。

III

人肉を食べたという Falk に対して Hermann は、最終的に知らんふりをしたが、最初はヒステリックに彼を“Beast!” (p.218) とののしり、荒れ狂った。この反応が「私」の感じたようにあまりにも“squeamish” (p.222) だと思われるのは、Falk の食人のみならず Falk という存在そのものが純粹無垢な自然

に結び付けられているためだろう。Falk の食人自体、激しい飢えに長い間苦しめられた彼のやむにやまれぬ自然発生的な行為だったが、その行為の忌わしさを祓うかのように、彼自ら自然の純粹さを持ち、その上彼は、純粹自然の具現のような Hermann の姪と結婚することになるのである。

Falk の自然性は、まず第一に、彼が人間的な過剰性から考えられる限り解放された存在として提示されているところに窺われる。Falk は、大柄の逞ましい肉体をしているが家畜のようにおとなしく、その本能的欲求を満たそうとする動きも決して狂暴でも悪魔的でもない。例えば、Hermann の姪に対する彼の求愛の仕方には、エロティシズムと呼ばれる人間特有の性的過剰さは全く見られない。彼の性の対象への接近の仕方は、“Amy Foster” で Amy が Yankoo の口笛を聞いてさかりのついた牝猫のように表に飛び出したのに似ている⁴。彼もまた、さかりのついた牝猫のように毎晩 Hermann の姪のそばにやって来るのだが、彼にできることは彼女の傍に黙って座っているだけである。それは、男性の求愛の仕方としては、信じ難いほどおとなしく刺激性をもたない。根源的な欲求から発したその動きは、人間のものでありながら、調和的な純粹自然に属しているような感じさえ起させる。一人で生きることは“impossible” (p. 215) だと言う彼の言葉に見られる Hermann の姪に対する欲求の強さも、恋いこがれるといった人間的過剰性のあらわれではなく、調和的自然の維持に欠かせない結合を阻害されることへの苦痛の表現であるように思われる。

それゆえ「私」が、Hermann の姪をひどく欲しがらる Falk について、“He was hungry for the girl, terribly hungry, as he had been terribly hungry for food.” (p. 224) と言ったのも、特別に驚くべきことではなかったのだ。Hermann に反対されて彼の姪と一緒に成れない苦しみは、Falk が昔飢餓に死の直前まで追いこまれた苦しみと同質のものであり、その二つの苦しみを癒すことは純粹自然の維持に必要なことであっても、それを乱すものでは決してなかったのである。そこにまた、食人という恐るべき行為が、Hermann の赤ん坊のしゃぶるという無邪気で本能的な動作と同質であると見なしうる根拠が求められると言えよう。

Hermann の赤ん坊がどれほど純粹自然に近い存在であるかは、彼を“Amy Foster” の Amy の赤ん坊と比べてみたとき、はっきりする。Amy の赤ん坊は、いつも子犬のように元気な Hermann の赤ん坊とは対照的に、何かに怯えているような弱々しさをさらけ出している⁵。その怯えは、“Amy Foster” を最後まで読み通した読者には、言葉という文化の罫に捕えられていく人間の哀しい宿

命に向けられているように感じられる。結局 Amy の赤ん坊は、人間の赤ん坊に特有の哀れな無力さをさらけ出すことによって、人間が赤ん坊のときから純粹自然からはじき出された不調和で不様な存在にほかならないことを示していると言えよう。

これに対して Hermann の赤ん坊は、言葉や文化よりも純粹自然に近いところにいるように描かれている。姉たちが「臨終ごっこ」に夢中になっているのを横目でじろりと覗む彼は、まるで “another tribe” (p.157) に属しているかのように、幻想に操られる人間の宿命的な弱さから免れているのだ。彼がこのような形で提示されているのは、一つの重要な理由があるからである。すなわち、人肉を食べたという意識のため純粹自然と人間社会の両方からはじき出された Falk を、純粹自然そのもののような Hermann の姪に結び付ける役割を、人間社会に生まれ落ちたばかりとはいえその社会の一員であることに間違いない Hermann の赤ん坊は果たしているのである。それは、彼がロープをかじったりして口を活発に動かす本能的な仕草によって人肉を食べた Falk との類似性を連想させながら、同時に、その元気が人間よりは動物の赤ん坊のそれに近いことによって、純粹自然の具現化のような Hermann の姪とも繋がっているからだ。

Hermann の姪が純粹自然を具現していると思われるのは、彼女が美しく豊かな肉体をもちながら言葉を一切しゃべらず名前さえもたないという存在の仕方をしているからである。彼女は、人間社会の一員というより、人間が様々な禁忌を設けて文化を作り上げる以前の無意識的存在そのものようだ。そのことによって、彼女の Falk の受け入れは完璧なものになっているのである。無意識的自然的存在として彼女は、食人という罪の意識に苦しむ Falk の姿を冷たく反射する鏡とは逆の働きをしている。つまり、彼をはねかえすのではなく飲みこみ、人間というより動物に彼が近づく地点まで彼を連れていくことによって、罪を消滅させるのだ。もちろん、彼女の表わす純粹自然は、彼女の美しい肉体に見られるように、理想化されている。そのことによってそれは、人間化されている嫌いがあると言えるかもしれない。特に、彼女が人肉を食べた Falk を哀れんで涙を流したときには、彼女の人間臭さがはっきり漂ってくるように思われるかもしれない。しかし、この彼女の慈悲心とでも、廣大無辺な仏のそれに似たものであり、それが自然から離れていることは確かだとしても、その分人間からも離れたものなのである。なぜならその慈悲心は、人間の営みを自然のそれに近づけることによって会得されるものなのだから。

さらに、Falkの食人行為そのものの自然性については、Falkの食人を *Heart of Darkness* の Kurtz の食人と比べてみたとき一層はっきりする。Falkが餓死直前のところまで追い込まれ、やむにやまれぬ状況の下で人肉を食べたのに対し、Kurtzは、病んだ自分の体を治すために儀式で生贄に奉げられた若者の肉を食べたのであった⁶。前者は言わば肉食獣の捕食に接近しているが、後者は、人間を無限に悪魔的にしていくことがある幻想にたぶらかされているのだ。つまり、私たち文明人には同じように見える二つの食人行為の間にも差があって、前者は自然に、後者は文化の側に属していると言えるのである。

恐ろしいのは、人間にとって耐えられないはずの食人も、後者の形をとると、喜んで歓迎されるようになるということである。Jacques Attaliがその著『カニバリズムの秩序』で明らかにしているように⁷、治療のための食人行為は、大昔から今日まで形を変えながら、絶えることなく継続されてきたのだ。人々はそのれに対して嫌悪の念を覚えるどころか、喜んでそれを受け入れ、自らをより健康にすることに専心してきたのである。この「カニバリズムの秩序」は、例えば、Hermann船長が健康で豊かな生活を目指して懸命に働くことによって知らないうちに帝国主義の熱心な推進者になっているところにも認められる。またそれは、Schombergが自分の店の繁栄を願うあまり、店に来てくれないFalkを激しく憎み、盛んに彼の悪口を言うところにも窺われる。いやそれは、前にも述べたように、“self-preservation”に囚われて自閉的になっているすべての作中人物の生活行動に認められる秩序だと言ってよいだろう。何度も言うようにそれは、向かい合わせに置いた二枚の鏡が遠々と映し出す“enfiling view”として把握できるものだ。その閉された人間社会のカニバリズムに対置されると同時に並置されているのが、Falkによる自然の食人行為にほかならない。そして、前者の安定した閉鎖的構造を揺るがすものとして、後者のおぞましさと罪のない自然性を同時的に捉える視点が私たちに与えられているのである。最後にこの問題について考えてみよう。

IV

Falkの食人は、前にも見た通り、Hermannの姪の具現する純粹自然の中ではその恐ろしさを消滅されるが、Hermannの赤ん坊からその姉や親たちへと繋がる文明の秩序の中では、身の毛のよだつ忌わしい行為と見なされる。後者の

見方だけが、Hermann のような人によってとられた場合、ヒステリックな拒絶をしたあとで知らんふりというように、反応が感情的に両極端に走って消滅する場合が多い。このことは先に見た通りだが、仮に後者の見方のみが、自然の食人と文明のカニバリズムを並置できる人によってとられた場合、どうなるであろうか。そのときには、自然の食人の明白なおぞましさと文明のカニバリズムの隠された忌わしさが並置されることによって、後者の忌わしさが白日の下にさらされることになる。私たちがあまりにも無自覚で無批判だった文明のカニバリズムの安定した秩序が、そのときその欺瞞性を暴かれるのだ。

しかし、Falk の食人を恐るべき野蛮行為としか考えない立場からの文明のカニバリズム暴露は、こわばって融通のきかない拒絶的なものになるのではあるまいか。折角、自然の食人と文明のカニバリズムを連綿と続く “enfilading view” の中に見通せても、前者のおぞましきまでしか見れないのであれば、反応が両方のおぞましきに対するこわばった拒否になるのもやむをえないかもしれない。が、それではやはり困るのである。なぜなら、そのように固定した反応では、この上なく強固な「カニバリズムの秩序」に対する非肯定的の姿勢に不可欠の、柔軟なねばり強さが不可能になるからだ。

「カニバリズムの秩序」の強固さは、Conrad が山々と共に古くから人間社会に存在していると言った Fidelity の根強さ⁸ に匹敵するように思われる。というのもその秩序には、自己や家族や友人や国家などに対する Fidelity が閉されるたびに、その支配力を強めていく構造が認められるからである。熱烈な Fidelity はもともと排他的で閉されやすいだけに、「カニバリズムの秩序」は、Fidelity と共に根強いと言えるぐらいだ。これほど強靱な秩序に対して、こわばった拒絶のような素朴な方法が通じるはずはないのである。それは丁度、私たちがその虜にしている Fidelity に対して、一方的に否定的な態度をとっても仕方がないのに似ている。Fidelity は、その首を切断したと思っても、すぐにまたそこから新しく頭が生えてくる怪物にほかならない。「カニバリズムの秩序」もまた、私たちが否でも応でもそこで生かされている現実にはほかならず、私たちはそれを拒絶してもほかに生きる場をもたないのである。

それでは、いかなる戦略がその秩序に対して可能であろうか。考えられる唯一の戦略は、Conrad が Falk を Hermann の姪に結びつけることによって暗示しているように思われる。前にも見たように、その二人の結合によって食人という忌わしい行為は、純粋な自然性をもっていることを明らかにされた。言わば、忌わしさと自然性は、その行為の裏表だったのだ。同じことは、自然の食

人だけでなく、文明のカニバリズムについても言える。丁度、向かい合わせに置いた二枚の鏡に映る相似形がその表と裏を交互に見せるように、自然の食人から文明のカニバリズムへ連綿と続く相似形にもすべて表と裏があり、それぞれが忌わしさと純粋性を合わせもっているのが認められるのである。例えば、生きるために懸命な Hermann や Schomberg たちにも、嫌らしい自己中心性の裏に、Schopenhauer の言う「盲目的意志」に突き動かされる哀れな動物的側面があったのだ。

もちろんこの見方は、文明のカニバリズムに安易な妥協を促すものでは決してない。全くその逆である。それは、文明のカニバリズムにおぞましきのみ見てそれをいたずらに拒絶するより、はるかに戦術的に優れたねばり強い行動を可能にするのだ。なぜなら、いたずらな拒絶が「カニバリズムの秩序」の中で私たちの動きをこわばらせるのと異なり、その見方は、私たちを自由に動かしながら最も徹底した凝視を私たちに行なわせるからである。この凝視によってカニバリズムの“enfilading view”を最も遠くまで見通せるようになった私たちは、その秩序を容認することも拒絶することもできないまま、いつまでも宙吊りの状態を生きることになる。この宙吊り状態は、閉された社会の“enfilading view”を根底的に見通すことがその社会秩序の承認を永遠に遅らせるところから生じたものだが、その不安定さにもかかわらず、その秩序に対する非肯定の姿勢に欠かせないねばり強さを可能にして、人間の生を実現するものである。

とはいえ、主人公の若い船長「私」は、Falk と Hermann の姪を結び付けることによって会得したと思われる根底的な凝視と宙吊りの生をいつまでも続けられないかもしれない。Fidelity や Love に閉されやすい「私」の性向が、「私」をいつ鏡の部屋に閉じ込めてしまうか知れたものではないのだ。それでも「私」は、発作的に Falk に話しかけたように、衝動的に外へ向かう力をもった人間である。この力がある限り「私」は、何度閉されようと確実に外へ飛び出せる契機を掴み、根底的な“enfilading view”を実現して、秩序に対する非肯定の姿勢をそのつどねばり強く続けてゆけるのではあるまいか。

Notes

- 1 Joseph Conrad, *The Nigger of the “Narcissus,” Typhoon and Other Stories*(London: Dent,1950), p.145.
以下、“Falk” から引用する文のページ数は本文中に示す。
- 2 “enfilade,” *Shogakan Random House English-Japanese Dictionary*, 1973 edn.
- 3 Joseph Conrad, *The Nigger of the “Narcissus,”* pp. 153–4.
- 4 Joseph Conrad, *Typhoon and Other Stories*, p.134.
- 5 *Ibid.*, p.142.
- 6 Stephen A. Reid, “The ‘Unspeakable Rite,’ in *Heart of Darkness*,” *Modern Fiction Studies*, IX(winter 1963–4), 347–356.
- 7 ジャック・アタリ (金塚貞文訳)、『カニバリズムの秩序』(みすず書房、1984)。
- 8 Joseph Conrad, “A Familiar Preface” in *A Personal Record*(London:Dent,1946), p.xix.

(昭和60年10月31日受理)